テーマ別英国文学案内：旅・女子・怪奇

経営学部　池田　伸

紹介者は英文学を専門としないがクリエイティブ産業について研究しているので，そのコンテントの一つである小説，たとえばいまより少し昔（おもに 17-19 世紀）の英国（以下ブリテン島と周辺地域の意）やその英語の文学についてたまたま考えてみた；

I. 英国（関係の-以下同じ）人はなぜアジアや極東，日本などまで（平気で）来るのか。旅行や冒険，オリエントへの関心はどのように生じ育まれたのか。
II. 英国作家には女子が多い気がする（日本では総活躍でない？？）。そうならなぜなのか，またそこではどのような主題が展開されているのか。
III. 英国文学の様式には近代初期から破格のメタフィクションがあり，内容的にもゴーストものや（反）ユートピアものがファンタジーにつながる気がする。

これらの系列に沿って（ほぼ）英国における小説の（ほぼ）大作家の古典（カノン）について案内する。カノン canon とは，解釈の変異や消長はあるが，英国なり欧州なりの文化圏での共通した正統な知識の基準とみなされる書物である。あまりに現代的なのは適さないので 20 世紀初頭までを考える。「文化圏で共通した正統な知識の基準」とはすでに問題含みであるが，簡単にいえば時代の教科書に出てきて習いそう，という作品である。

カノンは誰が決めるのでもないが決まっているようなものである。今回はそれを 3 つのテーマの系列とした。すなわち，「旅・女子・怪奇」である。このテーマ自体が目新しいつもりであるし，系列間の重複やねじれも玩味してほしい（他の系列要素を含んでいる）。

ただし，紹介者の勝手な趣向が優りすぎたり反対に読んでいないため必須なのに取上げられなかったりする作家や作品が当然存在する。また，不正確な情報などありうるので前もってお詫びと注意喚起しておく。筆者は英国に行ったこともなければとくに含むところもないが，この読書案内によって異なる視点や発想を提供できればと思う。みなさんはふだん各専門の勉強や研究にいそしんでいると思うが，そのための直線的な知識の獲得とは別の比較文学的読書もあるのですよ…

> Digressions, incontestably, are the sun-shine；---- they are the life, the soul of reading；（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*）

なお，原文や関連図書を読みたくなったら，図書館で探すかさまざまな専用サイトまたはプロジェクト・グーテンベルク（Project Gutenberg）に行くのがよいであろう。

Ⅰ　旅する英国文学

近代に入り英国の良家の子弟が欧州大陸諸国をめぐるグランド・ツアーが盛んになったが実はそれははずしてある。そのような整然とした意思的な旅行ではなく，諸般の事情から移動を余儀なくされその状況に立ち向かうような旅，まさに人生そのものを旅に託したケースを集めてみた。ただ，それは陰に陽に多く大英帝国の版図にかかわるものであった。

1.　トマス・マロリー（1399～1471）　アーサー王の死　1469

中世のアーサー王伝説を 15 世紀に獄中にありながらまとめたもの。エクスカリバーや円卓の騎士が登場するのでゲームなどで有名か。この文庫本（文献リスト参照）には収録されていないが聖杯伝説は映画「インディジョーンズ」にも用いられている原型的なもの。謎のキャメロットやアヴァロン島を本拠とするが，騎士らはむやみに冒険を求めイングランドを彷徨ししばしば決闘をする（そんな伝説的時代がとっくに過ぎた 17 世紀にドンキホーテは騎士道を再興しようとする）。

2.　夏目漱石（1867～1916）　薤露行（かいろこう）　1905

上の1.のあるエピソードを漱石がほぼ忠実にしかし見事な漢語の日本語散文に移した（翻訳とはいわないしエジプトとも関係がない）。行きずりの湖の騎士ラーンスロットに恋する乙女は後年のオフィーリアのよう。英国留学から帰国後一高・帝大の英語講師に赴任しつつも，盟友子規を失い日露戦争をはさんで，ついに漱石は創作をはじめる。本書は同種の「幻影の盾」や「猫」などの初期作品群に属し，近年では江藤淳の考証・評論がある。

3.　ウィリアム・シェイクスピア（1564～1616）　テンペスト　ca.1611

小説でなく戯曲なのでリストに入らないというのも窮屈なので，シェイクスピアからも選ぼうと思うが，全作品が何らか旅（や家族，法的紛争）を題材にしている。何でも該当するともいえるが，「テンペスト」（あらし）こそ沙翁最後のロマンス劇。南海の孤島で怪人キャリバーンや妖精エアリアルが英国帝国主義の表象としても読まれる。

4.　ジョン・バニヤン（1628～1688）　天路歴程　第一部　1678

これは旅とはいえ特殊な行程，すなわち重い肉体を脱ぎ捨て巡礼者が，さまざまな困難や誘惑に天国の門にいたる歩みである（同じ夢でも 14 世紀の「神曲」とは異なる）。作者は熱心なピューリタン信仰のため長期間投獄されるが，その間なった本書は当時のベストセラーであり，内容は厳しいがいま見ても挿絵も寓意的で，エンデ「はてしない物語」はこれに似ている。ピューリタンが新大陸へ大西洋を渡海することの象徴か。続編もある。

5.　ダニエル・デフォー（1660～1731）　ロビンソン・クルーソー　1719

長老派で政治パンフレット（当時の主要メディア）を書いていたデフォーが，当時流布した海洋遭難譚から創作したタイトルロール。たいへん具体的で地味な記述は本物の手記かと思われたそうだが，何年もたって配下にした現地人の名前は「フライデー」とは日記の曜日は正確か。そもそも主人公は南米へのやや冒険的企業家で投資家であり，そのようなグローバルに確立したコロニアル・システムからのアントレプレナーの漂流の記録とも考えら

れ，単独の経済行為という理念型には見えなかった。続編もあり，改作もある（クッツェー）。また，同著者の「ペスト」はカミュに先駆けたドキュメンタリー風の作品。

6.　ジョナサン・スウィフト（1667～1745）　ガリヴァー旅行記　1735

英国文学史上の最初（で最大）の近代的著者かもしれない（なお，アイルランド関係者は選択的に取上げることとする）。トーリー党と興亡をともにしアイルランドとイングランドとを往復したアングロ・アイリッシュの国教会の宗教家であったが，政治パンフレットなどを盛んに書いた（これらは系統 III で紹介する）。ガリヴァー物語は子供向けにも翻案されているが（筆者も初見はそう），むしろあらためて彼の相対化力を玩味してほしい。日本にも 1，2 ページ立寄っている。現代の読者には本文中に空飛ぶラピュータやヤフーが突然出現してびっくりするが，もちろんスウィフトの関知しないことである。

7.　ジェイン・オースティン（1775～1817）　分別と多感　1811

題名の Sense & Sensibility をどう翻訳するか。物語の結構は不明瞭であるし，映画でのブランドン大佐（A. リックマン！）のくぐもった柔らかい声の方が思い出される（なお，映画のシェイクスピアのソネットを読む場面は小説にはない）。ともかく，旅行編に分類したのは，戸主を亡くした郷士の母姉妹が家庭の事情で引越し，またつねに親戚らを訪ね寄留する小旅行の連続で現代では理解不可能な生活をしているからである。後出のサイードは別の長編「マンスフィールド・パーク」において，このような生活がコロニアルな収益を大前提としていることを読解したらしい。本作者は系統 II でも取上げる。

8.　H. G. ウェルズ（1866～1946）　タイムマシン　1895

ややこじつけて空間ではなく時間の移動のケース。系列 III で論じるが，過去ではなく未来へと旅をする。ヴィクトリア朝末の科学技術時代における元祖 SF であり，モーロック人の跳梁するようなディストピア・反ユートピアものの嚆矢である。しかし，未来のメカニズムの詳細よりも，新しい環境に自ら適応することに主眼がある。ダーウィンの進化論やそれに基づく社会改良主義が感じられる。

9.　ラフカディオ・ハーン／小泉八雲（1850～1904）　日本瞥見記　1894

ここからは 20 世紀にかけて自ら旅した作家の狭義のコロニアル文学といえる。アイルランドとギリシアの両親から生まれ米国から日本にきた「小泉八雲」であるがこの英国文学のリストにいれておく。以前松江城の濠端にあった記念館でニューオリンズでの新聞記者時代の執筆記事を見かけて，思いがけずモダンでシンプルな文体に驚き興味を持った。あまり知られていないのでカノンとはいいにくいし，当時流行の日本旅行記といえるが，受講した地方学生との交流もありコロニアリズムをどう考えるか。系列 III でも登場する。

10.　ジョセフ・コンラッド（1857～1924）　闇の奥　1899

作者は文化人類学者のマリノフスキーと同じくポーランド移民。実際の船乗りで海員資格のために移住して学んだ英語で作品を書いた（こういうケースをマイナー小説ともいう）。題材や作風は意外に？幅が広いが，アフリカ内陸深く河を遡行した場所に自分の秘密の王国を築く白人とその本国との関係を描いた本作は（ポスト）コロニアリズム小説の白眉とされ，コッポラの映画「地獄の黙示録」ではベトナム戦争に翻案された。

11.　R. L. スティーヴンスン（1850～1894）　南海千一夜物語　1893

順当なら？ここは「宝島」と来るところであるが，あえて本書を採った理由は次の 12.との関連。また，他の作品も旅というか英国外の舞台が多い。ともかく，エディンバラ出身の作者は現実に最晩年をポリネシアのサモアに過ごし，「瓶の妖鬼」などを含むハワイ・太平洋州を舞台にした本書を残した。でも本来は系列 III なので再登場してもらおう。

12.　中島敦（1909～1942）　光と風と夢　1941

上の RLS とくれば島の語りの名手である「ツシタラ」，とくれば中島敦という連想が働く。「現代国語」の教科書等に掲載される「山月記」「李陵」，また「名人伝」「文字禍」など漢文の名翻案で知られている。しかし，彼は中国には行かなかった（たぶん）。太平洋戦争開戦前後に南洋庁（という省庁があった）に就職をして短期間であるがパラオに派遣されている（帰国後本書を残しすぐ病死）。コロニアル国策遂行の現場にいたが，あるひと曰く，彼が北方に向うときは厳しく（とは限らないと思うが），南方へはやさしい。

13.　ラドヤード・キプリング（1865～1936）　キム　1901

以下から独立前の英国統治のインド地域関係から２冊。紹介者は子供のとき本作者の「ジャングルブック」の映画を観たようだが，そういうのに憧れた記憶しかない。本編はインドの北部で活躍するキム少年の冒険譚である。作者と相似？のインド生まれの孤児の彼はもっぱらヒンディー語を話すが，アイルランドのインド駐箚聯隊の軍人の遺子であった。チベット仏教のグルにしたがいながら，英国情報部の指令で列強に工作を行なう少年という設定はステロタイプの二項対立の図式（A/a）の範囲であるが，いくつかの点で劣位項に重点が置かれていると思う。本作で作者はノーベル文学賞を受賞したが，現代では彼の the white man's burden の解釈ポストコロニアル批評の最大の対象といえる。

14.　E. M. フォースター（1879～1970）　インドへの道　1924

キプリングから 1 世代を経たインド。翻訳の題名に道とあるのは passage で，道路ではなくスエズ運河経由のインド航路を意味する。インドの平原で襤褸をまとったガンジーたちが行進するような場面はまったくない。英国統治機関に勤めるムスリムの医師，インドに赴任している英国人の判事の母親，判事の婚約者と目される英国女性を中心としたややポリフォニー的で地味な小説である。スエズ運河が開通したので年配女性らがインドで主人公になりうるのである。作者には「眺めのいい部屋」はじめ映画化作品も多く，「民主主義に万歳二唱」では，三唱は不要といいながら系列 II で取り上げるブルームズベリー・グループの一員として自由と寛容とを信条として熱心に擁護していることで知られる。

番外　エドワード・W・サイード（1935～2003）　文化と帝国主義　1993

「オリエンタリズム」でオリエンタリズムの文献学を転覆させ，すべてはテキストであるとする脱構築を，すべてのテキストは地政学であると喝破した作者の本業に近い？ポストコロニアル文芸批評が本作。本系列で紹介した作品も同書 I で取上げられているが英国文学以外も対象とされている。なお，本リストはこれとは独立に選定されている。

II　女子の英国文学

昔は閨秀作家などと特別扱いしていたが，それにしても英国文学史上の最初期作に作家・主人公ともに女子のアフラ・ベーンの「オルノコ」がある。この作は「三四郎」で友人が「かわいそうだたほれたってことよ」と訳して暗闇先生にお下劣としかられることで有名？で，系列 1 との関連でも逸することができないが，紹介者未読のため掲載できない。ここでは女子の作家の作品と女子が主人公である作品（または両方）とを紹介しよう。

1.　ウィリアム・シェイクスピア　　終わりよければすべてよし　1603-4

現在 40 点ほどのシェイクスピア真筆の作品が現存するとされているが（含共作），いずれも本人の原稿ではなく上演舞台から台詞を逆に起こしたいわば海賊版に基づく。歴史的にその原稿の校訂作業をへて全作品が種々分類されているが，英国王朝（プランタジネット朝）の王名がつく叙事詩的背景を持つ「史劇」，主要登場人物その他大勢が存亡の危機に陥る「悲劇」があり，さらにそれら以外のものは「喜劇」（コメディ）に分類されている。このように喜劇は残余項として多様な内容が含まれ，とくに笑劇的要素の少ないものは「ロマンス劇」や「問題劇」といわれる。本作もそのような「問題劇」一つである。ヘレナは大胆な行動力と「ベッド・トリック」といわれる知謀とで彼女の思う大団円に持込もうとする。

2.　ジェイン・オースティン　　高慢と偏見　1813

題名の pride は高慢か自負（中野好夫）か。物語の主題が有産階級内の（限嗣）相続や婚姻とそれに伴う家産の行方や「格差」問題という主題とその変奏のガールズトークに終始し，人物や風景の描写もほとんどなく（たんに美人とだけ書かれている），職業生活も冒険もなく，最初から主要人物の真情が読者に（ほぼ）判明していて，ややご都合主義的な展開の結末も最初の予想どおりであったとしたら…オースティンの小説群は基本的にこのようなものである。しかし，彼女は「写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの点において，優に鬚眉の大家を凌ぐ。」（漱石）

3.　メアリ・シェリー（1797～1851）　フランケンシュタイン　1818

本来系列 III が妥当だが，女子が 19 世紀初頭に有名なモンスターを独自に創り出したことに意外感があるだろうか。若いフランケンシュタイン博士によってスイスにおいて屍体から制作されたモンスターは実質は人類の新生であった。彼はひとと同じように学習し言語を習得して，フランケンシュタインに正当に扱うことを要求し，花嫁の制作を求めたが拒否されたため報復を決意した。ゆえにモンスターには名前がない。副題に「現代のプロメテウス」とあるのは人類に火をもたらしたプロメテウスにフランケンシュタインを擬したためであるが，夫の詩人シェリーの「解放されたプロメテウス」に倣ったのであろう。

4.　シャーロット・ブロンテ（姉 1816～1855）　ジェイン・エア　1847

美人美男でなく生活や身分の差に苦しむような主人公が成立するか。自伝的要素も反映して，本作はオースティンとは対照的な成長物語に挑戦した。後半からはゴシック小説風味からカリブ海やインドにも背景が広がり，スピンオフ作品やポストコロニアル批評で取上げられることになる。シャーロットは Brontë 家の末の三人の姉妹の年長であったが，三人

はヴィクトリア朝当時の教育ある女子の唯一の職業といえる家庭教師（ガヴァネスとその学校設置）であった。それにも行き詰り，姉妹の頭文字を使った変名で「嵐が丘」と末妹のアンの「アグネス・グレイ」とは出版社と契約できたが，シャーロットのものはいまひとつとされた。そこで急遽原稿を差替えた結果本作が生まれた。わからないものである。

5. エミリー・ブロンテ（妹 1818～1848）　嵐が丘　1847

上のとおり姉妹の作品は出版されたが，その後エミリーはアンや兄とともに相次いで 30 歳前後に結核で死去した。本作を読んだのは学生時代なので中身の記憶は乏しいが，それでも本作を思うと、ヒースクリフの名前どおりヒースの海岸沿いの断崖の上の風景とそこを彷徨いながら「ヒースクリフ」と呼ばわるキャサリンの声が聞こえてくる。ただ，それは本作が何度も映画化されているので，何かの映像を観た印象かもしれない。

6. エリザベス・ギャスケル（1810～1865）　女だけの街　1851-3

世に二大女子翻訳題名問題があると思っている。一つは「女の平和」である。アリストパネス作劇の原題はまったく違う（はず）。もう一つが本作で原題「クランフォード」はたんに舞台となる街の名前である。中身も人口 1 万人の町の住人がほとんど女子だったとかアマゾネスとかの話ではまったくない。紹介者はこの題名なので実家にあった本書を長らく手に取ることはなかった。あえていうと日本の郊外の小さな町にあるような老嬢や未亡人の高齢化コミュニティのようである。本作はギャスケルの経験を基礎にしているといわれるが，たいへん現代的な状況に見える。ギャスケルはシャーロットの伝記作者でもある。

7. ジョージ・エリオット（1819～1880）　サイラス・マーナー　1861

男子名であるが作者は女子である。T.S. エリオットとは関係がない。H. スペンサーの紹介で知り合った不倫相手の名前を筆名にした。本作はタイトルロールの不幸な事情で村に居着いたもう若くない貧しい職人と孤児を中心に展開する「大人のためのおとぎ話」である。漱石の英語の教材の一つであった。エリオットは「ミドルマーチ」など他の本格作品で知られているが，他方で 19 世紀初頭のキリスト教批判・実証的研究の端緒となったシュトラウス「イエス伝」やフォイエルバッハ「キリスト教の本質」の独語からの英訳者であることに驚く。そう思うと本作の首尾は宗教批判後の「ヨブ記」の試みのように読める。

8. トーマス・ハーディ（1840～1928）　テス　1891

「ダーバヴィル家のテス」はひょっとして英国文学史上初の活動的な女子主人公ではないかと思う（「オルノコ」は別にして）。本作は名所のストーンヘンジまで使っているようなところや世紀末の露悪趣味的な点でヴィクトリア朝当時は歓迎されなかったようである。しかし，これに輪をかけた次作の「日陰者ジュード」や，故郷の「ウェセックスもの」とも併せ現在は高評価である。中身はかなり忘れているが夢中になって読んでいるちょうどそのとき，ポランスキー/ナスターシャ・キンスキーの映画が封切られたが未見である。

9. ジェームズ・ジョイス（1882～1941）　ザ・デッド　1914

本作を含む短編集は *Dubliners* とあるようにアイルランド文学であるが，オスカー・ワイルドとともにリスト入りした（スウィフトは別にしても）。「死者たち」（複数形？）では，雪の夜のダブリンでのパーティ（日本の法事に近いか）で，女子とのアイルランドをめぐる

政治論争と妻の告白とによって，自己充足的な中年男子に思いがけず生と死とが交錯した様子が描かれている。これは映画を先に観たがジョン・ヒューストンの遺作兼親子出演で当時評判になった。ジョイスには他に長編で同じくダブリンを舞台にした「ユリシーズ」（ギリシアのオデュセウスのラテン名）と「フィネガンズ・ウェイク」等があるが，彼はノーベル文学賞を受賞していない。翻訳不可能のためか（とくに後者）。日本でも柳瀬訳が出て衝撃が走ったが，「群馬対茨城」などとあり読書不能であった（原文は？？）。

10.　ジョン・ゴールズワージー（1867～1933）　リンゴの樹　1916

私見ではザ・デッド的な自己充足的な中年男子が本作では肯定的感傷的に描かれているので上とセットであげた。この作者はノーベル賞を受賞しているが不思議である。

11.　キャサリン・マンスフィールド（1888～1923）　園遊会　1922

マンスフィールドは NZ の有力な一家の才能ある娘であったが英国に留学しほぼ故国に戻らなかった。次の V. ウルフとは友人でライバルであったとされるが，若くして結核で健康を害し 30 歳余で死去した。本作は学校の英語のリーダーの教材？にもよく取入れられてるのではと思うが，中身は彼女の「メメントモリ」（「死を忘れるな」という標語）であり，これを読むと志賀直哉「正義派」が思い出される。

12.　ヴァージニア・ウルフ（1882～1941）　灯台へ　1927

ポリフォニー的な会話とは異なり，さまざまなひとの「意識の流れ」は違うさまざまな観点や時間から併存する。このような方法論を開発した V. ウルフはサッカレーやラファエル前派と関係する有名な両親の再婚同士の子で，それに伴う複雑な家族関係が影響を与えたのか最後は近所の川に入水した。彼女は兄弟とともに経済学者の J.M.ケインズや系列 I の E.M.フォスターらと交流を持った。かれらの住所（高級住宅街？）からブルームズベリー・グループといわれ，そのメンバーの一人レオナード・ウルフと結婚している。映画「めぐりあう時間たち」は彼女の生涯の精神障害やバイセクシュアリティを「ダロウェイ夫人」と融合させた作品である（未見で映画は最近かと思ったらかなり前であった）。なお，「ヴァージニア・ウルフなんかこわくない」は米国劇であるが，ウルフの綴りで o が一つ足りない狼の駄洒落で本人とは無関係と思われる。

13.　カレン・ブリクセン（1885～1962）　バベットの晩餐会　1958

デンマーク出身のカレン・ブリクセン（男性名でアイザック・ディネーセン等）も「バベットの晩餐会」「アフリカの日々」等を英語でも書いていて系列 I にも関係すると思って調べたら，英国とは直接関係がないらしいことがわかった。しかも，戦後の短編に近い作品だが，アーレント「暗い時代の人々」の一人としてエントリーしておく。本作は北欧のシンプルな新教的禁欲的シンプルライフに南のフランスからの旧教的美食が対比させられる。パリコミューン後難民となって流れ着いたバベットは，宝くじの賞金を消尽してパリの有名レストランのフルコース（系列 III アリスに出てくるようなウミガメ付，ただし本物）を村人にプレゼントしようとする。いまはなき渋谷のシネセゾンで上映された映画を観てから本作を読んだ。

番外　ガヤトリ C. スピヴァク（1942～）　ポストコロニアル理性批判　1999

スピヴァクはカルカッタ（コルカタ）出身で，米コーネル大学のポール・ド・マンの下で比較英文学を修めたが，彼女は J.デリダの紹介者/批判者として，また抑圧された「サバルタンは語ることができるか」によってポストコロニアル論のリーダーとなった。その集大成である本作は「ネイティブ・インフォーマント」をキーワードに広汎な言及があるが，とくに 2 章「文学」では本リスト掲載作が多く取上げられている ;「ジェーン・エア」とスピンオフの前編？のジーン・リース「サルガッソーの広い海」(1966),「フランケンシュタイン」,「テンペスト」，キプリングと「ロビンソン・クルーソー」と続編？の J.M.クッツェー「敵あるいはフォー」（1986, デフォーの本名の Foe に由来する）など。

その他，吉田良夫（2004）『英国女性作家の世界』大阪教育図書，も事実関係を中心に参考にした。

Ⅲ　怪奇とファンタジーの英国文学

英国人は怪異な物語を好むといわれるがどうか。怪異とは自らとは違った異文化体験の表現であろう。その源泉の一つは系列 I で大陸やアジア・オリエントの文化として取上げたが，ここではそれらを背景にした別の系統を考える。近代化における政治的宗教的葛藤（国教会の成立と国民国家）ともかかわり破格の小説（というか何というか）が「パメラ」より先に出現する（未読です)。つまりフィクションの成立以前にメタフィクションが現われるのである。さらに中世への郷愁としてゴシックノベルからファンタジーや近代推理小説への流れがあり，また社会科学とも踵を接した（反）ユートピア小説から SF へ続く系統があるように思われる。近代化に先んじた英国ならではかもしれない。

ユートピアと反ユートピア

1.　ベーオウルフ　8 世紀頃？

デンマーク周辺のキリスト教化しつつあるアングロ・サクソンの北欧英雄伝説叙事詩であるがあえて怪奇英文学ユートピア群の出発点としておく。映画「ロード・オブ・ザ・リングス」の隠れた原作？でもある（トールキン)。「カインの末裔」とされるグレンデル母子の物語は渡辺綱の鬼（茨木童子？）退治に類似する。唯一の古英語の写本で伝わるが，ブリテン島まで北海のはばが数百 km くらいなので交通があったか。私事にわたるが新訳の忍足先生とは所沢のおじさんの店で行き違った（と思う)。

2.　トマス・モア（1478～1535）　ユートピア　1516

世界史の教科書にも出てくるまさにユートピアの元祖。ラテン語で書かれここからの帰還者からの話という体裁を取るが場所は聞きそびれたととぼけている。ユートピアはどこにもない場所の意味であるが，実際には当時の旧教教会や第一次囲込み等政治経済状況の批評である。同じころ独のヴィッテンベルクではルターが免罪符などに関して教会批判を開始した。いま欧州の大学間単位互換制度に名が冠されているエラスムスは旧教の実態を批判した「痴愚神礼讃」をモアの家で書き，ルターとは結局袂を分かった。その後自らの離婚を可能とするためヘンリー8 世（シェイクスピアの同名史劇参照）は国教会を旧教から分

離し，高官でありながら賛成しなかったモアは本作中で死刑や苛烈な刑事政策に反対していたが断頭台に送られた。映画「わが命つきるとも」 *A Man of All Seasons* に描かれているらしい。

Interlude　1

英国中心に見た（反）ユートピア小説は，その後彼岸性が空間から時間に移り，宗教問題は３つの要素，社会主義，進化論および機械文明に代替したように思われる。この評価とブレンドの具合が（反）ユートピアの程度にかかわると思われる。英から NZ に渡った S.バトラーは山の彼方の「エレホン」（nowhere のアナグラム；1872）で反ユートピアを描写したが，米のベラミ「顧みれば」（1880）や芥川が卒論で取上げた「アーツ＆クラフツ」の主唱者 W. モリスによる「ユートピアだより」（1890）は現実の社会変革を念頭に肯定的である。他方，（反）ユートピアの系譜は系列 I でも取上げた「タイムマシン」（1895）を経て，ロシア革命後の現実の政治経験から，露の E.ザミャーチン「われら」（1927）や英の「ダーウィンのブルドッグ」を祖父に持つ A.ハクスレー「すばらしい新世界」（「テンペスト」の台詞から：1932）や「1984」が続く。戦後では，これに子供の無邪気無思慮を加えたような「蝿の王」（題名は悪魔のベルゼブブのこと；1954）は後にノーベル文学賞を作者の W.ゴールディングにもたらした。ともかく現代の SF は，R.ブラッドベリ「華氏 451 度」（1953）にせよ P.K.ディック「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」（映画は「ブレードランナー」；1968）にせよ伊藤計劃「虐殺器官」（2007）にせよ，ほぼこの後継ジャンルともいえる。

3.　ジョージ・オーウェル（1903～1950）　1984　1949

戦後作品であるがもはや古典的作品という点で例外的に採用した（村上春樹の「1Q84」は何らか脈絡はあると思うが，紹介者は学生時代に「羊」を映像学部 H 先生から借りて読み，あまりの感動にこれ以上の村上作品はないと思い，その後の同著者の作物はほとんど読んでいないため不明である）。ENGSOC におけるピジン英語ならぬニュースピークの文法入門が付録にあり，たとえば過去形および過去分詞は-ed とする（たとえば thinked）など不規則性が追放されマスターし易い。ダブル・シンクの促進も期待されるが，そうしないでほしい。著者オーウェルはインド生でアジアで「象を撃つ」ような英国コロニアリズムの現地生活を体験，スペイン内戦で反フランコ義勇軍に参加し負傷，19「48」年に本書を著し，直後に病没した。

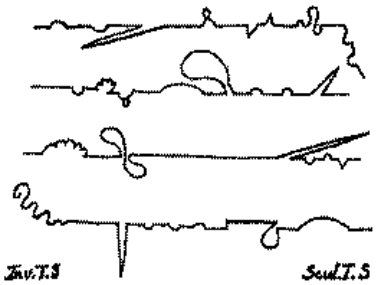
最初からメタフィクション

4.　ジョナサン・スウィフト　　桶物語，書物戦争 1704

再びスウィフトである。「文学評論」で漱石は政治宗教風刺が日本ではわかりにくくまた創作上の制約となっているとして，本作より系列 I の「ガリバー」に軍配を上げているが，逆に旧教と新教でも国教会と清教徒との関係について世界史的な意義が感じられて，いまでも洒落も結構通じると思う。なお，題名は船乗りが海でリバイアサン？に出会ったら水桶を投げ込んで気を散らす（黄泉平坂でのイザナギみたいに）ことに由来するそうだが，やっぱりわかりにくいか。併録の「書物戦争」は現代作物は古典を超えたとする評論へのあてこすりである元祖ビブリオバトル。スウィフトの他の著作も政治パンフレット兼メタフィクションが多く，後世に大きな影響を与えた。

5.　ローレンス・スターン（1713～1768）　トリストラム・シャンディ　1761-7

紙と印刷との技術革新があり，小説が製本の形で出回るとすぐ？に国教会牧師の手になるこのようなものが世に出るとは驚きである。「紳士トリストラム氏の生活と意見」と副題にあるが，どちらもあまり関係しない。文中「ドンキホーテ」へのオマージュがあり，スウィフト的でもある。漱石の「トリストラム，シャンデー」を借りると「怪癖放縦にして病的神経質なる「トリストラム，シャンデー」にあり，「シャンデー」程人を馬鹿にしたる小説なく，「シャンデー」程道化たるはなく，「シャンデー」程人を泣かしめ人を笑はしめんとするはなし」だそうである。説明に窮したので本文での筋の図解？を掲げておく（漱石もそうしている）。



6.　ルイス･キャロル（1832～1898）　不思議の国のアリス　1865／鏡の国のアリス　1872

君はまだ本当のアリスを知らない。この企画のため読み直したらチェシャキャットとハンプティダンプティとは別の本に出現していた。つまり読んでたつもりで未読であった（アニメのせいか？）。著者のキャロル（本名ドドソン）が数学者であったことは知られているが，たとえば「不思議の国」の最初の方で「4 x 5=12 等なので 20 には達しない」とアリスがいうのは 18 進法から 42 進法をふまえているとのこと*。ジャバウォッキーの詩？をはじめ翻訳はたいへんだったであろう。メタフィクションとファンタジーとの融合。やはり読むときにはオリジナルのテニエルの挿絵が必要と思った。

*)稲木昭子・沖田知子(2010)『謎解き「アリス物語」』PHP 新書.

7.　夏目漱石　　文学論　1907／文学評論　1909

両者とも元は帰国して東京帝国大学でのハーンの後を襲った講義録である。前者は留学前後の年月に心血を注ぎ本大作がなった「不愉快」と「神経衰弱」の事情を綴った序についで，文学作品の内容を F（認識的要素）+f（情緒的要素）の構成とし，その組合せのようなものを蜿蜿論じている難解の理論書である。しかし，中身には古今の英文学（散文・詩歌・戯曲）からの抜書きが例示として縦横に散りばめられている。粉本があるにしても漱石の相当な文学および英語の力量をうかがわせる。現代の専門家はどう評価しているのか。「評論」は 18 世紀英国文学が主題で，本リストに関してはスウィフトとデフォーとが取上げられ，その扱いも本リストと近いが，前半の見てきたような当時の英国風俗論が面白い。

ゴーストからゴシックへ

8.　ウィリアム・シェイクスピア　　ハムレット　1600-01

シェイクスピアの作品でゴーストが出現するのは「マクベス」のバンクォーや「リチャード三世」の犠牲者が思い浮かぶが，ハムレットに復讐をせまる先王である父親の亡霊には唯一台詞がある（たぶん）。舞台がデンマークのエルシノア城であり，ハムレットとホレーショとはヴィッテンベルクの大学での学友で，ギルデンスターンとローゼンクランツとはブリテン島への使者であるようにベーオウルフ同様北海方面にも関係がある。スターンお気

に入りのヨリックも登場するものの悲劇の現場は凄惨である。志賀直哉は「クローディアスの日記」で誤読？しているが，そっちの解釈が正しく思える。

9.　チャールズ・ディケンズ（1812～1870）　クリスマス・キャロル　1843

少しとんでヴィクトリア朝の大家ディケンズであるが，詳しくないので有名な幽霊譚を紹介するに止める。幽霊に連れ回される Scrooge はいまや守銭奴の普通名詞化し，本作もクリスマスものの定番となっているが，それだけに定型的といえる。コリンズやギャスケル（「女だけの町」ではボズ（ディケンズのこと）の「ピックウィック・ペーパーズ」を読んだか，とあり，漱石も引用している）らと交流があった。

10.　ラフカディオ・ハーン／小泉八雲　　怪談　1904

本作は通俗的怪談の再話で主であり「耳なし芳一のはなし」や「雪女」が有名である。他にも「霊の日本」なども未見であるが同様と思われる。へたをすると同時代のピエール・ロティのような異国趣味に陥るところが避けられているのは，本人の素質・経歴・文体・観点なのか。東大での授業は評判がよく，後任の漱石忌避運動も起りそうになったらしい（しかし，漱石の講義も意外に？好評だったそう）。

11.　オスカー・ワイルド（1854～1900）　ドリアン・グレイの肖像　1890

ここからヴィクトリア朝末期のゴシックノベルの最後の輝きの作品群を取上げる。共通点は二重人格・容姿であろうか。ワイルドはアングロ・アイリッシュで，欧米各地をさすらい毀誉褒貶甚だしく，告訴・投獄を経験した。童話「幸福な王子」や仏語で書かれた戯曲「サロメ」でも知られる。本作は二重性が絵画やホモセクシュアリティに表れている。

12.　R.L. スティーヴンスン　　ジキル博士とハイド氏　1886

善と悪との葛藤が物的かつ人格的な二重性に表わされた「ストレンジ・ケース」。でも変化の過程がよく理解できない。ゴシックノベルでもあろうし，初期の SF ともいえる。なお，漱石はこの作者の文体を買い，なかでもジャコバイトからアメリカまで出てくる活劇「バラントレーの若殿」を押しているが，そこまでのものかとも思う。

13.　H.G. ウェルズ　　透明人間　1897

before&after での二重性はすでに SF へ移行した感があるが，何が透明になるのかなど詳細がよくわからない点は同様である。直接 12.を参考にしたそうで確かに似ている。

14.　ブラム・ストーカー（1847～1912）　吸血鬼ドラキュラ　1897

B.ストーカーはアイルランドの人でゴシックノベルの掉尾を飾る本作は形式も書簡などを配列した旧いフレームストーリーにしてある。英国とトランシルバニアとの往復や求婚者たちが追跡者に移行する点，標的になる被害者などに必然性が感じられないが，この時期において活劇的要素，中世的要素に加え中欧的異国趣味がブレンドされている。本作ではヴァン・ヘルシング博士が活躍するが，近年のヒュー・ジャックマンの同名映画ではここまでのゴシックノベルの主人公が総出演しているらしい。

Interlude　2

ゴシックノベルとは，ここでは「フランケンシュタイン」から「ドラキュラ」の間の 19 世紀における中世懐古的怪奇小説に相当する。メアリ・シェリーの父の社会運動家ゴドウィンも自ら怪奇小説も書き，そもそも「フランケンシュタイン」は同書の２つの序文のように夫のシェリーやバイロンとレマン湖畔でゴシックノベルを真似て怪談を書く試みから生まれた。他の二人は結局抛棄した。ところが，バイロンの完成品と誤伝？されたポリドリの作からレ・ファニュの女子吸血鬼「カミーラ」（1872），後輩のストーカーへと吸血鬼譚は繋がる。ついでに「奇妙な味」の短編にもふれておこう。たとえば，何度読んでもよくわからないディケンズ「信号手」（1866），３つの願いが叶う W.W.ジェイコブズ「猿の手」（1902），ビルマ生まれで第一次大戦で戦死したサキの「スレドニ・ヴァシュター」（1910）や「開いた窓」（1911）など。

推理小説の誕生

15.　ウィルキー・コリンズ（1824～1889）　月長石　1868

最初期には「モルグ街の殺人」（1841）などの米国の E.A.ポーの一連の作品があげられるが，本格的な推理小説としてあげられるのは本作である（しかし，このトリックの性質もあり反対意見もある）。月長石とは比較的安価な鉱物ではなくインドの寺院から略奪されて英国にもたらされた由緒あるダイヤモンドである。その宝石の奪還をめざすインドのグループと相続をめぐる親族間とのもつれた事件である。狂言回しの執事は「ロビンソン・クルーソー」を座右の書として読書を勧めている。W.コリンズはディケンズの盟友で，前作の「白衣の女」がサスペンスに富む作品として大ヒットしたらしい。

16.　サー・アーサー・コナン・ドイル（1859～1930）　緋色の研究　1887

推理小説をとりあげたらホームズ譚は避けて通れない。読み直そうと平井図書館で探したら「シャーロック・ホームズ全集」があって，シャーロッキアンが細かい脚注を施しているのでびっくりした。ともかく，本作はホームズものとしても長編（ノベラ）でも第一作である（「グロリア・スコット号事件」などは物語の時間的に先行するが）。いったいホームズの長編の核はトリックよりも伝奇的要素が強く，ゴシックの末裔であることをうかがわせる。本作ではワトソンはカンダハルから復員したところで，事件は米国の西部ユタ州に由来している。コナン・ドイルは複合姓でエディンバラの出身，同大学を卒業して医師として開業したり船医をしたりしてひまなときに執筆をしたようである。彼は多彩であったが，後年は保守的でスピリッチュアリズムの活動に専心していた。

番外

S.モームを本リストから落としてしまったが，彼は戦後「世界十大小説」で３つの作品を英国文学から採用している。うち２つは本リストの系列 II に入っている作品である（調べてみて）。米国向けに書かれた彼の「読書案内」（1940）では，

…as the plain man with a proper interest in humanity. The first thing I have asked of a book before I put it on my list was that it should be readable.　（Books and You）

と選書の考え方が述べられているが，本企画も同様の精神である。

その他，英国文学全般について総記的に石塚久郎他編著（2014）「イギリス文学入門」三修社等を参照した。